

マサバの完全養殖をめざして

～ 宮崎大学産学地域連携センター ～

宮崎大学では、地域との連携、地元企業さんへの技術移転をすすめる一連の取組みである、意見交換会「マッチングのためのラウンドテーブル」を開催されております。

このほど、水産業に関連する表記ラウンドテーブルが開催され、宮崎のさかなビジネス拡大協議会として参加しましたので報告します。

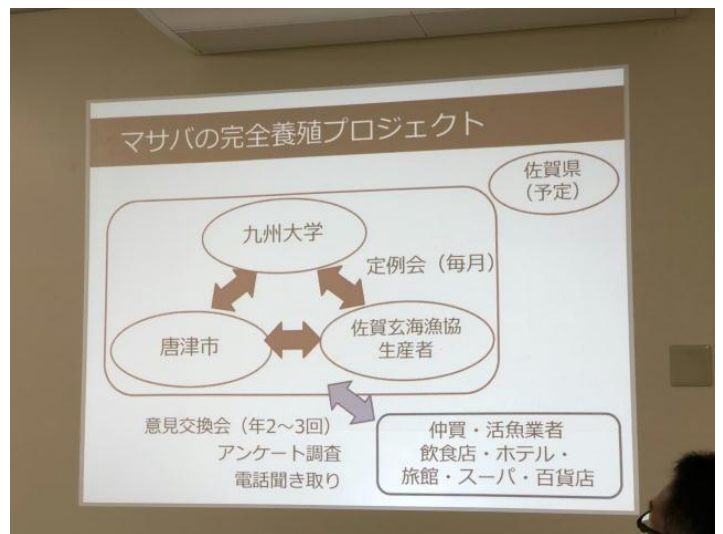
まず事例報告として、宮崎大学農学部海洋生物環境学科に赴任されている長野直樹准教授が、自身が九州大学勤務時代から取組んでこられた佐賀県唐津市の「マサバ養殖」事例報告がありました。

唐津市では、水産業振興をねらいに平成24年から、マサバの採卵技術と完全養殖を目指して九州大学と提携。長野准教授はそのプロジェクトの中心となって、技術開発や育成方法の検討、さらには売り先確保まで支援してきた事例を数多くの写真や図表で判りやすく説明されました。

唐津市では、現在6個事業者さんが養殖に取り組んでおり「唐津Qサバ」としてブランド化。年間出荷が6万尾超までになったとのこと。長野先生は、宮崎県でも「マサバ完全養殖を取り組めないか」との提案でした。

一方会場内には、延岡市北浦で「ひむか本サバ」を養殖している漁業家さんも来場され、過去に「人工種苗」に取り組んだ際の苦労話や、現在進めている「天然種苗」を養殖しての「ひむか本サバ」の育成上のメリット・デメリットなどの報告もあり、各分野から参加された産学官民20名余りの参加者からもそれぞれの立場から多彩な議論が繰り広げられました。

今後、これら活発な議論を通じて、今、話題になっている「アニサキス問題」をクリアできそうな「完全養殖の道」が、宮崎県でも始まることを期待しております。



■宮崎のさかなビジネス拡大協議会 副会長兼事務局長 津曲睦己